「日米開戦 ハワイ真珠湾攻撃」 メモ

●昭和16年12月8日、日米開戦 大勝利に沸いた

▽午前7時(少し前) 館野守男(アナウンサー)「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます」

大本営陸海軍部発表(12月8日午前6時)

帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり

日米開戦を聞いて…

高村光太郎「世界は一新せられた。時代はたった今大きく区切られた。昨日は遠い昔のようである」 (中央公論17年1月号)

伊藤整「私は急激な感動の中で、妙に静かにああこれでいい、これで大丈夫だ、もう決まったのだと、安堵の念の湧くのを覚えた。この開始された米英相手の戦争に、予想のような重っ苦しさはちっとも感じられなかった。方向をはっきり与えられた喜び、弾むような身の軽さがあって、不思議であった」(一二月八日の記録)

岸田日出刀「わたしの一生のうちで、これほど感激の一瞬はまたとあるまい。…来るべきものが遂にきたという厳粛な気もちだけに、言いしれぬ感激をおぼえるだけである。 (新女苑17年2月号)

▽東条英機(首相)はじめ 日本の最高指導部がどう論議判断し 開戦を決定したかは敗戦まで 最高の国家機密だった

▽国民は 日米交渉が行き詰まり 一触即発状態を肌で感じていた もやもやが晴れ 青空が…

▽10日には マレー沖海戦で 英東洋艦隊壊滅 戦艦プリンス・オブ・ウェールズ レパルス撃沈

●12日の閣議は、「大東亜戦争」の呼称を決定

▽情報局発表 「今次の対米英戦は、支那事変をも含め大東亜戦争と呼称す。大東亜戦争と称するは、大東亜新秩序建設を目的とする戦争なることを意味するものにして、戦争地域を大東亜のみに限定するものに非ず」

大本営海軍部発表(8日午後1時)

一、帝国海軍は本八日未明ハワイ方面の米国艦隊並に航空兵力に対し決死的大空襲を敢行せり

二、帝国海軍は本八日未明上海に於て英砲艦「ペトレル」を撃沈せり米砲艦「ウエイキ」は同時刻我に降伏せり

三、帝国海軍は本八日未明新嘉坡を爆撃し大なる成果を収めたり

四、帝国海軍は本八日早朝「ダバオ」「ウエーク」「グアム」の敵軍事施設を爆撃せり

高村 光太郎(たかむら・こうたろう)

明治16(1883)～昭和31(1956)東京生まれ。詩人・彫刻家。光雲(彫刻家)の長男。詩集「道程」「智恵子抄」「暗愚小伝」

伊藤 整(いとう・せい)

明治38(1905)～昭和44(1969)北海道生まれ。小説家・評論家。昭和25年「チャタレイ夫人の恋人」の翻訳が、猥褻文書で起訴され話題に。33年東京工大教授

岸田 日出刀(きしだ・ひでと)

明治32(1899)～昭和41(1966)福岡県生まれ。建築学者。大正14年東大工学部助教授となり安田講堂設計。昭和4年教授

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。関東軍参謀長を経て昭和13年陸軍次官。15年第2次近衛内閣陸相となり中国撤兵に反対。16年10月首相。陸相、内相を兼務し対米英開戦。憲兵政治、翼賛選挙により独裁体制を固め、戦局悪化で19年には参謀総長も兼務したが、サイパン陥落で7月総辞職。戦後、拳銃自殺を図り未遂。A級戦犯で絞首刑

▽戦争目的が「自存自衛」(8日の宣戦の詔書)から
大東亜共栄圏確立 アジア解放に 変わった

●南方作戦は順調だった
▽12月10日グアム島 23日ウエーク島 25日香港
17年1月2日マニラ 2月15日シンガポールを占領
▽ボルネオ スマトラの油田地帯も
落下傘部隊の奇襲攻撃で 破壊されずに確保
▽半年足らずの間に 西は ビルマから
マレー半島 スマトラ ジャワ
ソロモン諸島に至る 広大な地域を 占領下に

「木戸幸一日記」(12月8日)

「七時十五分出勤、今日ハ珍シク快晴ナリ、赤坂見附ノ坂ヲ上リ三宅坂ニ向フ、折柄太陽ノ赫々ト彼方ノびるでいんぐノ上ニ昇ルヲ拝ス
思ヘバイヨイヨ今日ヲ期シ我国ハ米英ノ二大国ヲ対手トシテ大戦争ニ入ルナリ、今暁既ニ海軍ノ航空隊ハ大挙「ホノルル」ヲ空襲セルナリ、コレヲ知ル余ハ成否ノ程モ気ヅカハレ、思ハズ太陽ヲ瞑目祈願ス、七時半首相ト両総長ニ面会、「ホノルル」奇襲大成功ノ吉報ヲ耳ニシ神助ノ有難サヲツクヅク感ジタリ」

●3年8ヵ月後の敗戦を、予感した人もいた
▽東久邇宮は「日本はいよいよアメリカの外交謀略にかかって、日米戦争に自ら突入してしまった。これで日本は没落の第一歩にふみ込んだと知って、私はがっかりした」(一皇族の戦争日記)
▽富塚清(東大工学部教授)は その朝の講演会で
「日本は資源も乏しく、科学技術もレベルが低いので、いくら頑張っても近代戦争には勝ち味がない」その後開戦を知り「さりとは、けさの講演まずかったかなあと思ったが、あとの祭り」

ノモンハンの教訓は、生かされなかった

田中角栄(23歳)は、満州で3年間の兵隊勤務を終え、東京で土木工事の現場監督をしていた。「私が入隊してからすぐ起こったのが、例のノモンハン事件(昭和14年5月)で、負けたことのない日本軍が、初めて負け戦を味わった。宣戦布告

宣戦の詔書(8日)

「…帝国ノ存立亦危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ッテ一切ノ障碍ヲ破砕スルノ外ナキナリ」

相次ぐ戦果の発表に…

国民はラジオにかじりつき、16年度新規契約は132万。戦前の最高記録だった。新聞社の掲示板も、ニュース速報を見ようと、連日黒山の人だかり。南方地域の大きな地図が掲げられ、日本軍の占領地を示す小さな日章旗が次々と飾り付けられていった。
17年正月には「わが荒鷲決死の撮影ハワイ大空襲の記録」が上映され、歌舞伎座では早朝から2万の観衆。街中至る所に「進め一億火の玉だ 屠れ米英我らの敵だ！」のポスター。砂糖特別配給や子供にはゴム靴、ゴムまり。

木戸 幸一(きど・こういち)
明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相を歴任し、15年内大臣に就任。開戦前の16年10月、東条を後継首相に推挙。戦争末期、反東条となり倒閣、終戦に尽力した。A級戦犯で終身禁固刑となったが、30年出所。著に「木戸幸一日記」

東久邇 稔彦(ひがしくに・なるひこ)
明治20(1887)～平成2(1990) 京都生まれ。旧皇族。陸軍大将。第2、第4師団長など歴任し昭和16年防衛総司令官。20年8月皇族内閣を組織、終戦処理に当たる

富塚 清(とみづか・きよし)
明治26(1893)～昭和63(1988)千葉県生まれ。大正7年東大航空研究所助教授。昭和7年同大工学部教授。戦後、明大・法大教授。著に「ある科学者の戦中日記」

と聞いて、すぐノモンハン事件を思い出した。こっちは騎兵で乗馬隊だったが、向こうは戦車隊だった。そして思う存分押し潰された。ソ連を相手にしてさえ、そうだったのだから、英米相手となると乗るかそるかの戦争になったなあ、と強く感じた」（昭和41年東京12チャンネルの番組で）

ノモンハンの敗戦は火力、機動力の圧倒的な違いだった。一番の責任者服部卓四郎（関東軍作戦主任参謀）は、責任も問われずに昭和16年7月参謀本部作戦課長に栄転し、開戦論の先頭に立った。

●東条内閣を開戦に追い詰めた「ハル・ノート」

▽11月26日夕 ハル（國務長官）から
野村吉三郎 来栖三郎両大使に 手交された

「ハル・ノート」

正式名称は「合衆国及ビ日本国間協定ノ基礎概略」。日本が採るべき措置として10項目を挙げているが、要するに①中国、仏印からの全面撤兵②中国では重慶の蒋介石政権以外は認めないこと（南京の汪兆銘政権の否認）③日独伊三国同盟骨抜きにしろ、という強硬なもの。

「試案にして拘束力なし」と、もともとは日本側に石油一部提供など暫定協定案を提示し、それが受け入れられた後で本交渉に入る際の米国側の基本的立場を列挙した付属文書。ところが、蒋介石が暫定協定に強硬に反対、ルーズベルトも「日本の輸送船団南下」情報に激怒したこともあって、付属文書だけが、むき出しで突き付けられる形になった。

▽日米交渉に 最後の望みの 東郷茂徳（外相）が
「眼も暗むばかりの失望に撃たれ、戦争を避けるために、眼をつむって鵜呑みにしようとしてみたが、喉につかえて迚（とて）も通らなかった」

▽吉田茂（対米交渉乙案の起案者）は 東郷に 交渉継続を勧めた
「これは最後通牒なんかじゃないよ。どこにも交渉打ち切りとは書いてないじゃないか」

吉田は切言した

「これで以て、交渉をこのまま続ける。それが

田中　角栄（たなか・かくえい）
大正7（1918）～平成5（1993）新潟県生まれ。蔵相、自民党幹事長を経て昭和47年首相。「今太閤」と人気を集めたが金権・金脈問題で49年辞任。51年、ロッキード事件で逮捕され、有罪判決を受けた

服部　卓四郎（はっとり・たくしろう）
明治34（1901）～昭和35（1960）山形県生まれ。陸軍大佐。一貫して作戦畑を歩み昭和14年関東軍参謀（作戦主任）。15年参謀本部作戦班長、16年作戦課長。17年陸相秘書官に転出したが18年再び作戦課長に就任、陸軍の主要作戦を立案、指導

ハル（Cordel Hull）
1871～1955 ルーズベルト大統領時代、昭和8年から19年にかけ米国務長官。国連創設に尽力の功績でノーベル平和賞

野村　吉三郎（のむら・きちさぶろう）
明治10（1877）～昭和39（1964）和歌山県生まれ。海軍大将。大正3年駐米武官。第3艦隊長官、学習院長などを歴任し昭和14年阿部内閣外相。16年2月駐米大使として日米交渉に当たる。29年参院議員

来栖　三郎（くるす・さぶろう）
明治19（1886）～昭和29（1954）神奈川県生まれ。外務省通商局長、ベルギー大使を経て昭和14年駐独大使。16年11月、特派大使として渡米。夫人は米国人

蒋　介石（しょう・かいせき）
1887～1975 明治40年日本に留学。昭和3年国民政府主席となり対日戦を指導。戦後、国共内戦に敗れて台湾に渡る

汪　兆銘（おう・ちょうめい）
1883～1944　字は精衛。法政大卒。蒋介石と合作政権を作り、行政院長。昭和13

大本営政府連絡会議で聞き入れられなかったら、構わんから辞表を出せ。君が外相を辞職すれば閣議も頓挫する。無分別な軍部も、少しは反省するだろう。君は殺されるかも知れん。それで殺されたって、男子の本懐というべきだ。骨はオレが拾ってやる」

▽東郷は 苦笑し 首を振り続けるだけだった

●大本営政府連絡会議は11月27日、「開戦已むなし」

▽「ハル・ノートは、明らかに最後通牒であり、日本が受諾出来ないことを知りながら通知してきた」

大本営政府連絡会議

戦争中の国策決定の最高機関。構成員10人のうち8人までが軍人。政府側=首相、外相、蔵相、企画院総裁、陸海相。統帥部側=参謀総長、軍令部総長に両次長。鈴木貞一(企画院総裁)も軍人だから、軍人以外は東郷(外相)と賀屋興宣(蔵相)だけ。どうしても軍の意向が強く反映される。

▽ハル自身「日本が受諾するだろうとは、本気に考えていなかった」

日本は 背景を 冷静に検討する必要があった

独ソ戦線では形勢逆転が始まっていた

ドイツ軍はモスクワ目指し進撃していたが、冬将軍が例年より1ヵ月早くやって来た。夏の装備のまま、大砲も戦車も凍り付き動けない。

ヒットラーがモスクワ攻略作戦の中止、後退命令を出したのは日米開戦の日だった。

日本の外交は余りに直線的で拙劣

マレー半島は12月を過ぎると、季節風が強まって波が激しくなり、上陸作戦が難しくなる。武力発動を12月初頭と定め、外交交渉に1日午前零時までと、タイムリミットをつけた。軍の作戦計画が国家の方針を左右する ― 本末転倒が生じた結果だった。

●「ハル・ノート」を出してきた背景は？

年重慶を脱出し15年南京に国民政府を樹立、主席に就任。名古屋で病死

ルーズベルト(Flanklin Roosevelt)
1882～1945 昭和8年第32代米国大統領に就任。第2次大戦に指導力を発揮し異例の4選を果たしたが、終戦直前に急死

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)
明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て昭和16年東条内閣外相兼拓務相となり日米交渉に当たる。翌年、大東亜省設置に反対し辞任。20年鈴木内閣外相兼大東亜相。A級戦犯で禁固20年。拘禁中に病死。著に「時代の一面 大戦外交の手記」

吉田 茂(よしだ・しげる)
明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。外務次官を経て昭和11年駐英大使。戦後外相となり21年首相。5次の内閣を組織。26年講和条約調印。29年造船疑獄で辞職。元老として大きな影響力。国葬

鈴木 貞一(すずき・ていいち)
明治21(1888)～平成1(1989) 千葉県生まれ。陸軍中将。昭和15年興亜院政務部長。16年戦争経済担当の企画院総裁。A級戦犯で終身禁固刑。31年出所

賀屋 興宣(かや・おきのり)
明治22(1889)～昭和52(1977)広島県生まれ。大蔵次官を経て昭和12年第1次近衛内閣蔵相。16年東条内閣蔵相。A級戦犯で終身禁固刑。30年出所。政界に復帰し、33年衆院議員。38年池田内閣法相

ヒットラー(Adolf Hitler)
1889～1945 昭和8年ドイツ首相。一党独裁体制を確立し、14年第2次大戦を起こす。ベルリン陥落直前に自殺

▽ルーズベルト 三選(昭和15年11月5日)の際の公約
「アメリカは、攻撃されない限り戦争をしない」
▽アメリカの 最優先目標は「打倒ドイツ」
ヒットラーは アメリカ刺激を 避けていた
▽合衆国憲法では 開戦の権限は
大統領にはなく 議会が握っている
▽選挙公約との 矛盾を防ぎ
議会 国民に 戦争を納得させるには
もう一つの道 ドイツと同盟している日本から
先に 手を出させる必要があった
▽「ハル・ノート」は 日本を 挑発するためだった
▽閣僚会議(11月25日=ハル・ノート提出の前日)の後
ハルは スティムソン(陸軍長官)に
「私はもう手を洗った。
後は君とノックス(海軍長官)の仕事だ」

●アメリカは、「挑発行動」に動いた
▽スターク(海軍作戦部長)は 27日
各司令官に戦争警報「本電報を以て戦争通告と見なすべし。日米交渉はすでに終わり、日本の侵略行動は数日内に予期せらる」
▽マーシャル(参謀総長)は ショート中将(ハワイ陸軍司令官)に
「もし敵対行為を避け得ざるとせば、米国は最初の公然たる行為を日本が犯すのを欲する」
▽東条は 遺書に「大東亜戦争は彼より挑発せられたるものにして、我は国家生存、国民自衛の為、已むを得ず起ちたるものなり」
▽冷静であるべき外交責任者 東郷までが
「日本の自殺に等しい」と 感情的に反発
「長年に亙る日本の犠牲を全然無視し、極東に於ける大国たる地位を棄てよと云うのである」

●太平洋戦争では、大勢の若者が戦場で命を落とし、広島・長崎の原爆、空襲で、たくさんの命が奪われた

幸田露伴は、ハワイ空襲に涙を流した

幸田文(次女)が話している。「父は『そうか、そうか、そんな年若い者がね。そうして出かけて行ったのか』って涙を流しましてね。『もったいない』って言うんですよ。『考えてもごらん、まだ咲かない、これからの男の子なんだ。それ

スティムソン(Henry Stimson)
1867～1950 昭和4年から4年間、米国務長官を務め、開戦時陸軍長官。戦争末期日本に天皇制存続を容認する形での早期和平を主張したが、実現しなかった

スティムソンの日記(11月25日)

問題は、どのように彼ら(日本)を操って、われわれには余り過大な危険を及ぼすことなく、最初の一発を発射させるような立場に、彼らを追い込むべきかということであった。これは難しい注文だった。

「日本の発砲」挑発の指令も

スタークは12月1日、ハート大将(アジア艦隊司令長官)に宛てて、「大統領はこの通信受理後、可能ならば2日以内に可及的速やかに以下をなすよう指令す」
①3隻の小型船を徴用して情報哨戒隊を作れ②米国軍艦であることを示すため、米海軍士官に指揮をとらせ、装備は機銃1丁で十分である③3隻は海南島、仏印沖合に配備せよ。

東郷は、戦後の批判に反論

「ハル・ノート」を頭から拒否するのではなく、交渉の対象にしておけば、の声に、「当時の事情を知らない空虚な議論」としている。
「即ち『ハル』公文を受諾した後の日本の地位が、敗戦後の現在の地位と大差なきものとなるべきであることは、また疑いの余地はない。されば戦争による被害がなかっただけ有利ではなかったかとの考があるかも知れぬが、これは一国の名誉も権威も忘れた考え方であるので論外である」
(東郷の手記「時代の一面」)

があの暁の暗い空に、冷や酒一杯で、この世とも日本とも別れて、遠い所へ、そんなふうに発って行ったのだ。何といっていいんだか、わからないじゃないか」って言ってね、涙をこぼしていたんです。この日から父が憂いましてね。「この若い者達を、そんなにしてつぶしてしまって、事が成り立つはずがないじゃないか。これはもう一遍でひどい事になる」って、言うんです」　（昭和41年東京12チャンネルの番組で）

▽世界をよく見て　日本の貧弱な国力を　把握し
　冷静に　対処するリーダーは　いなかった

東郷、獄中の歌

唯一つ　妥協したるがくやしくも
　其後のまがつみ（凶事）　凡てはこれに

●昭和天皇は、政府の「開戦決意」を心配された
▽「和戦決定」の　12月1日の御前会議に
　「首相経験者を出席させ、広く意見を聴きたい」
▽東条は「輔弼責任のない重臣が入って審議決定するのは、責任の所在を不明瞭にする」と反対
　それでも　天皇の強い要望で
　11月29日　重臣懇談会の形で　開かれた
▽政府側説明に「開戦已むなし」三分の一
　「臥薪嘗胆しても現状維持」が　三分の二
　若槻礼次郎　岡田啓介は
　「物的国力の上から成算は疑わしい」
　米内光政は「ジリ貧を避けようとして
　却ってドカ貧に陥る恐れあり」
▽政府・統帥部は　開戦一本に　固まっていて
　重臣の慎重論に　耳を貸そうとはしなかった

●30日には、高松宮（海軍中佐）が「海軍の不安」を訴えた
▽保科善四郎（海軍省兵備局長）に　前日　船舶状況などを
　質したところ「長期戦には見込みがない」
　「今この機会を逃したら、戦争は到底
　抑え切れない」と　最後の善処を　要請された

「昭和天皇独白録」から

戦争の見透に付ても話し合ったが、宮の言葉

幸田　露伴（こうだ・ろはん）
慶応3（1867）～昭和22（1947）　江戸生まれ。小説家・随筆家。本名成行。「五重塔」「天うつ浪」「幻談」などの作品を発表、鋭い観察力と洗練された文章で多くの業績を残した。昭和12年第1回文化勲章

幸田　文（こうだ・あや）
明治37（1904）～平成2（1990）　東京生まれ。昭和22年、随筆「父－その死」が認められて随筆家・小説家として活躍した。新潮社文学賞、日本芸術院賞受賞

若槻　礼次郎（わかつき・れいじろう）
慶応2（1866）～昭和24（1949）　島根県生まれ。大正15年首相。昭和6年再び首相。満州事変勃発で8ヵ月で総辞職

岡田　啓介（おかだ・けいすけ）
明治1（1868）～昭和27（1952）　福井県生まれ。海軍大将。海相を経て昭和9年首相。二・二六事件で襲撃され難を逃れる

米内　光政（よない・みつまさ）
明治13（1880）～昭和23（1948）岩手県生まれ。海軍大将。海相を経て昭和15年首相に就任。三国同盟に反対し、陸相辞職で総辞職。19年現役に復帰して小磯・鈴木内閣海相となり、終戦に尽力した

高松宮　宣仁親王（たかまつのみや・のぶひと）
明治38（1905）～昭和62（1987）大正天皇の第3皇子。海軍大佐。戦争中、軍令部参謀、砲術学校教頭。戦後は国際文化振興会総裁など。海兵在学中、大正10年から書き続けられた「高松宮日記」（20冊）

保科　善四郎（ほしな・ぜんしろう）
明治24（1891）～平成3（1991）　宮城県生まれ。海軍中将。昭和15年海軍省兵備局長、軍務局長。30年～42年衆院議員

に依ると、統帥部の予想は五分五分の無勝負か、うまく行っても、六分四分で辛うじて勝てるといふ所ださうである。私は敗けはせぬかと思ふと述べた。宮は、それなら今止めてはどうかと云ふから、私は立憲国の君主としては、政府と統帥部との一致した意見は認めなければならぬ、若し認めなければ、東条は辞職し、大きな「クーデタ」が起り、却て目茶苦茶な戦争論が支配的になるであらうと思ひ、戦争を止める事に付ては、返事をしなかった。

▽木戸に「どうも海軍は手一杯で、出来るならば戦争は避けたいようだが、どうなのだろうか」

▽嶋田繁太郎(海相) 永野修身(軍令部総長)が 急遽参内

「計画は万全であります。物も人も共に十分の準備を整えて、大命降下をお待ちしております」

「ドイツが戦争を止めるようなことがあった時、どうする積もりか」に 嶋田は「ドイツは真から頼りになる国とは思っておりませぬ。たとえドイツが手を引きましても全く関係ありません」

▽嶋田は 手記に「明日はいよいよ開戦決定の御前会議という時に、天皇に不安を抱かせるようなことは畏れ多いと思った」

●御前会議は12月1日、開戦を決定した

「対米英蘭開戦ノ件」

「十一月五日決定ノ『帝国国策遂行要領』ニ基ク対米交渉ハ遂ニ成立スルニ至ラズ、帝国ハ米英蘭ニ対シ開戦ス」

▽天皇は 終始 沈黙されたままだった

天皇がなぜ開戦を阻止出来なかったのか

戦後「戦争は天皇の聖断で終わらせることが出来たのに、開戦の時はどうして」といった批判が出た時、藤田尚徳(侍従長)に答えている。

「内閣にしろ、外交にしろ、憲法上の責任者が慎重に審議をつくして、ある方策を立て、これを規定に遵って提出して裁可を請われた場合には、私はそれが意に満ちても、意に満たなくても、よろしいと裁可する以外に執るべき道

「高松宮日記」(10月29日)

明治神宮参拝。ソレカラ海軍省へゆき、話を聞いて廻はる（大野大佐、神重徳、嶋田海相、保科兵備局長）

嶋田　繁太郎(しまだ・しげたろう)

明治16(1883)～昭和51(1976)東京生まれ。海軍大将。昭和7年軍令部第3部長となり、10年次長。横須賀鎮守府長官を経て16年東条内閣海相。19年2月軍令部総長兼務。A級戦犯で終身刑。30年出所

永野　修身(ながの・おさみ)

明治13(1880)～昭和22(1947)高知県生まれ。海軍大将・元帥。昭和11年広田内閣海相。12年連合艦隊長官。16年軍令部総長となり、海軍開戦論の先頭に立つ。A級戦犯で起訴され、裁判中に病死

日本の政策は常にドイツ依存

「対米英蘭戦争終結促進ニ関スル腹案」(御前会議11月15日決定)では「速ニ極東ニ於ケル米英蘭ノ根拠ヲ覆滅シテ自存自衛ヲ確立スルト共ニ更ニ積極的措置ニ依リ蒋政権ノ屈伏ヲ促進シ独伊ト提携シテ先ツ英ノ屈伏ヲ図リ米ノ戦争意志ヲ喪失セシムルニ勉ム」

つまり、米国を直接屈伏させる手段はなく、対米戦収拾の機会は、ソ連軍敗北による独ソ戦終結時、あるいはドイツ軍の英本土上陸時に訪れるだろうとしており、あくまでドイツ勝利が前提だった。

藤田　尚徳(ふじた・ひさのり)

明治13(1880)～昭和45(1970)東京生まれ。海軍大将。昭和7年海軍次官。呉鎮守府長官、軍事参議官を経て14年予備役。18年明治神宮宮司。19年～21年侍従長。著に「侍従長の回想」

はない。もしそうせずに、私がその時の心持次第で、ある時は裁可し、あるときは却下したとすれば、…これは明白に天皇が、憲法を破壊するものである」　（藤田の「侍従長の回想」）

▽終戦は　ポツダム宣言受諾か　徹底抗戦かで割れ
　鈴木貫太郎（首相）が
　天皇の裁断を仰ぐ形をとったので　出来たが
　　開戦の時は　政府・統帥部一致の決定だった
▽明治憲法の　特異な統治構造
　統帥権と　国家の政治指導分裂に　日本の悲劇

明治憲法は、すでに内部崩壊していた

東条は、ミッドウェー海戦の大敗（昭和17年6月5日空母4隻喪失）を天皇から知らされ愕然とした。情報がどこかで隠され共通の認識にならないのでは、適切な戦争指導が出来るはずもない。嶋田は戦争中、天皇が心配しないように部下に「石油は十分ある」と、嘘の報告資料を作成させていた。輔弼に当たる者が責任を果たさず、天皇制が「無責任の政治体系」と言われる所以だ。

●二・二六事件（昭和11年）も、大きな影を落としていた
▽木戸は　東郷の話では「ハル・ノートで
　纏めようとするなら、内乱になるよ」
　「ほとんど一顧の価値さえ認めぬ気配だった」
▽永野も　クーデターを恐れた
　富岡定俊（作戦課長）に「満州から手を引けというアメリカの条件を容れたら、クーデターが起こるだろう。クーデターを起こすのは大体陸軍だ。そうなると、陸海軍が相撃つことになる。この戦争は支離滅裂なものだ。どうしても戦争を避けられないとすれば、大義名分に沿った戦争を正々とやって、収拾を考えた方がよいと思ったのだ」

●「ハル・ノート」の中国に、満州を含むのか？
▽「苛酷だ」とする　最大の理由に
　「満州からの撤兵と、
　　満州国政府の否認を要求してきた」
　東条も　宣誓供述書（東京裁判）で　そう言っている

鈴木　貫太郎（すずき・かんたろう）
慶応3（1867）～昭和23（1948）千葉県・関宿藩出身。海軍大将。連合艦隊長官、軍令部長を歴任し、昭和4年侍従長。二・二六事件で襲撃され、瀕死の重傷。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し終戦

「豈朕カ志ナラムヤ」

宣戦の詔書に「今ヤ不幸ニシテ米英両国ト戦端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ」
東条は赤松貞雄大佐（秘書官）に述懐した。「どうしても戦争に突入しなければならぬとの結論に達したので、お上に御許しを願った。しかし、なかなか御許しがなかった。そしてようやく已むを得ないと仰せられたのである。お上が真に平和を愛しておられ、平和を大事にしておられることを目のあたり拝察出来て、私は何と申し訳ないことを御許し願わなければならないのかと、残念至極であった。お上は日英同盟のこと、英国御訪問中受けられた英国側の厚情など静かに仰せられた。宣戦の大詔の中に「豈朕カ志ナラムヤ」とある文句は、もともと原案には無かったものを、特にお上の仰せで加えれたものである」

赤松　貞雄（あかまつ・さだお）
明治33（1900）～昭和57（1982）秋田県生まれ。陸軍大佐。昭和13年東条次官秘書官。スイス駐在後に陸相秘書官。16年首相秘書官。著に「東条秘書官機密日誌」

富岡　定俊（とみおか・さだとし）
明治30（1897）～昭和45（1970）長野県生まれ。海軍少将。海大教官を経て昭和15年軍令部作戦課長。南東方面艦隊・第11航空艦隊参謀長を歴任し19年作戦部長

「満州は入っていなかった」

ジョン・トーランド（ピュリッツァー賞作家）は「ハル・ノートの内容については、日米間に悲劇的な誤解があった。ハルのいう『シナ』には、満州は含まれず、第一、彼は最初から日本による満州国放棄など考えていなかった。ハル・ノートはこの点をもっと明瞭にしておくべきであった。満州国がそのままだとさえわかれば、日本はあれほど呑めぬと考えはしなかったことだろう。東郷外相も、もっと主戦論者を説得し、日米交渉継続を主張しやすかったはずである」

（「真珠湾攻撃」昭和57年文芸春秋）

▽「ハル・ノート」10項目には「満州」は出てこない

▽原型は 対日強硬派モーゲンソー（財務長官）提案

起草者はホワイト（特別補佐官）

ＩＭＦ（国際通貨基金＝昭和19年加盟国の出資によりワシントンに創設された国際金融機関）の創案者で、初代理事長。戦後23年夏、「ソ連のスパイ」として告発され、自殺した。

▽国務省の修正案は「米国政府の採るべき態度」で
　日中両国に対し 満州の将来の地位に関して
　　平和交渉に入るよう 斡旋し
　中国からの撤兵も 括弧内で「満州を除く」

▽これが「ハル・ノート」として 提示された時は
　平和交渉提案も「満州を除く」も 削除された

●問題は、日本側がどう判断したのか

▽原嘉道（枢密院議長）は 御前会議（1日）で質問した
　「支那という字句の中には、満州国を含むのかどうか。このことを両大使に確かめられたのか。また両大使はどう了解しているのか伺いたい」

▽東郷（外相）は 日米諒解案（4月16日提案）を
　未だに「米国提案だ」と 誤解していた
　「もともと米提案の中には、満州国を承認するということがありますので、支那にはこれを含まぬのでありますが、話が今度のように逆転して重慶政権を唯一の政権と認め、汪政権を潰すというように進んで来たことから考えますと、前言を否認するかも知れぬと思います」

古賀峯一（海軍大将）の言葉

歴史をみれば、内乱で国は亡びることはない。責任者は内乱を恐れず、断乎として開戦を阻止すべきであった。

古賀　峯一（こが・みねいち）

明治18（1885）～昭和19（1944）佐賀県生まれ。海軍大将。軍令部次長などを経て昭和18年4月連合艦隊長官。ダバオへ移動中に搭乗機が墜落し殉職。死後元帥

「モーゲンソー案」では

第1項で日本に対する撤兵要求を掲げ、中国については「1931年国境」。昭和6年満州事変の起きた年だから、この国境が満州事変以前を指すものなら、中国には満州を含むことになる。

しかし第6項は、「ソ連が極東の前線から相応の残留部隊を除き全ての軍隊を引き揚げるという条件で、警察力として必要な2、3個師団を除き、満州から日本軍を撤収する」日本の利点として「満州建設」を挙げている。

これだと、満州での日本の実効支配を認めた上で日本軍の限定駐屯も認めていることになる。そこには、極東ソ連軍を一刻も早く独ソ戦線に投入するため、関東軍兵力を最小限のものにしたい ― ホワイトに対するソ連の働き掛けがあったのでは…。

原　嘉道（はら・よしみち）

慶応3（1867）～昭和19（1944） 長野県生まれ。弁護士を経て昭和2年田中内閣法相。中央大学長となり、13年枢密院副議長。15年から死去するまで同議長

参謀本部「機密戦争日誌」

11月27日　果然米武官ヨリ来電、米文書ヲ以テ回答ス。イワク、(1)四原則ノ無条件承認(2)支那及仏印ヨリノ全面

▽「満州問題」は 野村 来栖大使に 確認もせず
論議らしい論議もなく 打ち切られた
▽瀬島竜三(当時大本営参謀)は「政府及び陸海軍は、
支那の中に満州は含まれないと、速断していた」
「機密戦争日誌」が「米ノ回答全ク高圧的ナリ」
4項目で「汪兆銘政権否認」を挙げながら
「満州国政府否認」には 全く 触れていない
▽冷静に 詰めるべき点を 詰めていなかった

●陸海軍の作戦準備は、着々と進められていた
▽連合艦隊司令部は 11月21日午前零時
「フジヤマノボレ一一二一」 各艦隊は予ての
指令通り待機地点より作戦海面に進出せよ
南雲忠一(第1航空艦隊長官)指揮の 機動部隊は
26日午前6時 単冠湾(択捉島)を出航 ハワイへ
▽寺内寿一(南方軍総司令官)は 25日 サイゴン(総司令部)へ
▽12月2日 開戦決定を受け 暗号電報が飛んだ
陸軍部隊に「日ノ出ハ山形トス」
海軍部隊には「新高山ノボレ一二〇八」

●アメリカは「マジック」(日本の外交暗号解読)により、日本の行動開始が目前に迫っていることを知っていた
▽11月28日 東京電は「交渉決裂」を伝えた
▽12月に入ってからの電報は ワシントン大使館に
暗号機1台と それに必要な暗号書だけを残し
重要書類の破棄・焼却 大部分の館員が
飛行機で ワシントンを発つよう 命じていた
▽アメリカは 日本の行動開始を 待っていた
日本の攻撃目標が 真珠湾と知らなかっただけ
真珠湾攻撃は「SNAKE ATTACK」
決して「だまし討ち」では なかった

●真珠湾攻撃は、「米国史上最大の軍事的被害」
▽2時間ほどの攻撃で アリゾナなど
戦艦4隻が 沈没・転覆 18隻(戦艦4隻)が大被害
飛行機の破壊・焼失231機 戦死・不明2,402名
▽日本側損害 飛行機29機 特殊潜航艇5隻 戦死64名

●「真珠湾空襲さる、演習にあらず」
▽第一報は 海軍省に 7日午後1時50分(ワシントン時間)

撤兵(3)汪兆銘政権ノ否認(4)三国同盟ノ空文化。米ノ回答全ク高圧的ナリ。交渉ハ勿論決裂ナリ。

瀬島 竜三(せじま・りゅうぞう)
明治44(1911)～平成19(2007)富山県生まれ。陸軍中佐。昭和14年大本営参謀となり、20年関東軍参謀。シベリアに11年抑留。帰国後伊藤忠に入社し副会長。臨時行政改革推進会議議長を務めた

南雲 忠一(なぐも・ちゅういち)
明治20(1887)～昭和19(1944)山形県生まれ。海軍中将。水雷戦隊司令官などを経て昭和16年4月第1航空艦隊長官となり、真珠湾攻撃を指揮。19年中部太平洋艦隊長官。サイパン島で戦死、大将進級

寺内 寿一(てらうち・ひさいち)
明治12(1879)～昭和21(1946)山口県生まれ。陸軍大将・元帥。正毅(元帥)の長男。昭和11年広田内閣陸相となり軍部大臣現役武官制復活。16年南方軍総司令官。敗戦後、シンガポールで病死した

開戦日の暗号電報
「日ノ出」と「新高山」は、予め決めてあった開戦日X日の隠語。山形は8日のこと。陸軍は1日広島、2日福岡など10日までの開戦日に全国の都市名を当てていた。新高山は台湾中部・玉山(3997㍍)。海軍は運命の開戦日に富士山より高い日本の最高峰を選んだ。

東郷外相の電報(11月28日付)
帝国政府ハ、カクノ如キ提案ハ決シテ今後ノ交渉ノ基礎トスルコトハ出来ナイ。ヨッテ二、三日中ニ貴下ニ送ルトコロノ帝国政府ノ見解ヲ以テ交渉ハ事実上決裂スルデアロウ

▽ノックス(海軍長官)は「まさか、そんなはずがない。
フィリピンの間違いではないのか」
▽ルーズベルトは 冷静だった
「自分に代わって、日本が決定を下した」
選挙公約から 一挙に 解放されることになった
▽この衝撃を 最大限に 利用した
8日午後 上下両院本会議場で 演説した
「昨日1941年12月7日は、ｉｎｆａｍｙ、屈辱の日として、長く記憶されるべきでありましょう。アメリカ合衆国は、日本帝国により突如、計画的に襲撃されたのであります」
▽日本の最後通告が 真珠湾攻撃後と 遅れたため
「リメンバー・パールハーバー」の 合言葉に

●空母を集中使用し、飛行機で米太平洋艦隊を叩く
▽世界海軍の常識を破った「ハワイ作戦」
▽「16年度帝国海軍作戦計画」(昭和15年12月27日)には
なく 全く 山本五十六(連合艦隊長官)の発想だった
▽万一 日米戦争になった時「まずハワイを」と
考えたのは 連合艦隊演習(15年3月)だった
▽飛行機の雷撃訓練で どんなに 軍艦が避けても
やられてしまう 傍にいた福留繁少将(参謀長)に
「飛行機でハワイをやれないものか」
▽米海軍が 15年5月 日本の南進牽制のため
「太平洋艦隊のハワイ常駐」を 発表した時
山本構想は 現実味を 帯びてきた

嶋田(海相)宛ての手紙に苦渋の決断

「…種々考慮研究の上結局開戦劈頭有力なる航空部隊を以て敵本営に斬込み彼をして物心共に起ち難き迄の痛撃を加ふるの外無しと考ふるに立至りたる次第に御座候…大勢に押されて立上らざるを得ずとすれば到底尋常一様の作戦にては見込立たず結局桶狭間とひよどり越と川中島とを合せ行ふの已むを得ざる羽目に追込まるる次第に御座候」(16年10月24日付)

▽アメリカ駐在 2度の経験から「デトロイトの自動車工業と、テキサスの油田を見ただけでも、アメリカを相手に無制限の建艦競争を始めて、日本の国力で到底やり抜けるものでない」

おびただしい「真珠湾もの」

中でも話題になったのがロバート・スティネットの「真珠湾の真実 ルーズベルト欺瞞の日々」(平成13年文芸春秋)
ルーズベルトは、真珠湾攻撃を事前に全て知っていたというのだが、こうした真珠湾論争が未だに続いているのは、太平洋艦隊が大混乱に陥り、記録に不備、空白が多いこと。日本海軍も敗戦の際、作戦計画、戦闘詳報の類まで焼いてしまったため、日米共に信頼性の高い資料が不足していることにある。

山本　五十六(やまもと・いそろく)
明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。大正8年米国駐在、ハーバード大学留学。14年駐米武官。霞ケ浦航空隊副長、赤城艦長、航空本部長を歴任し、昭和11年海軍次官。14年連合艦隊長官となり、真珠湾攻撃を立案、実行した。前線基地視察中、ソロモン諸島上空で撃墜され戦死した。死後元帥。国葬

山本は再三、「一忍」を訴えた

次官時代、次官室の壁には、「百戦百勝如一忍」の掛け軸が懸けてあった。東条内閣海相に嶋田繁太郎(海兵同期)が就任すると、手紙を書いて「大局より考慮すれば日米衝突は避けられるものならば此を避け隠忍自重臥薪嘗胆すべきは勿論なるもそれには非常の力と勇気とを要す」と奮起を促した。

福留　繁(ふくどめ・しげる)
明治31(1898)～昭和46(1971)鳥取県生まれ。海軍中将。昭和14年連合艦隊参謀長。16年軍令部作戦部長。18年連合艦隊参謀長。19年搭乗機がセブ島で不時着、ゲリラの捕虜となり陸軍部隊に救出される。第2航空艦隊長官など歴任

▽日本海軍は 日本海海戦(明治38年5月27日)以来
やって来る敵艦隊を 迎え撃つ作戦
山本構想承認までは 容易ではなかった

●「ハワイ作戦」を明らかにしたのは、昭和16年1月7日、及川古志郎(海相)に提出した「戦備ニ関スル意見」

「戦備ニ関スル意見」

「開戦劈頭採ルヘキ作戦計画」として、「勝敗ヲ第一日ニ於テ決スルノ覚悟」で「ハワイノ太平洋艦隊ニ対シ月明ノ夜又ハ黎明ヲ期シ全航空兵力ヲ以テ全滅ヲ期シ敵ヲ強(奇)襲ス」

▽大西滝治郎少将(第11航空艦隊参謀長)に 研究を命じ
作戦立案に 選ばれたのが 源田実中佐(航空参謀)
▽源田は 革命的な 変革を試みた
各艦隊に 分散配備の空母を 1ヵ所に集め
4月10日 航空決戦を目的とする
第1航空艦隊を 編成した
赤城 加賀(第1航空戦隊) 蒼竜 飛竜(第2航空戦隊)
竜驤 春日丸(第4航空戦隊)
10月 翔鶴 瑞鶴(第5航空戦隊)を編入 空母8隻に
▽艦載機の指揮を 艦長 飛行長から 取り上げ
統一指揮を 淵田美津雄中佐(赤城飛行隊長)に一任
▽艦上攻撃機は出水(鹿児島) 戦闘機は佐伯(大分)
艦載機を 機種別に 陸上基地に分散させ
真珠湾を想定した 猛訓練に当たらせた

●9月16日、「ハワイ作戦」初の図上演習が海軍大学校で
▽軍令部は 福留(作戦部長) 富岡(作戦課長) 共に反対
▽図上演習でも 米哨戒飛行艇に発見され 強襲に
「被害甚大」の判定(空母2隻沈没 2隻小破 飛行機損害127機)
▽軍令部は「まず南方油田地帯に最大の兵力を投入して確保した後、敵主力の来攻に備えるべきだ」
▽第1航空艦隊幹部も 反対だった

日本は「人」でも負けていた

南雲は水雷科出身。飛行機に全く縁のない提督が、艦隊長官になる中将の先任序列第1位ということで、大機動部隊の指揮をとることに。航空作戦に経験・能力から誰が適任かでなく、中将になったのは、どっちが先か、それが同じ

及川 古志郎(おいかわ・こしろう)
明治16(1883)～昭和33(1958)岩手県出身。海軍大将。横須賀鎮守府長官を経て昭和15年第2次近衛内閣海相。18年海上護衛総長官。19年軍令部総長

大西 滝治郎(おおにし・たきじろう)
明治24(1891)～昭和20(1945)兵庫県生まれ。海軍中将。昭和16年第11航空艦隊参謀長。軍需省航空兵器総局総務長官。19年第1航空艦隊長官となり、レイテ海戦で特攻攻撃を採用、指揮した。20年軍令部次長に就任、終戦翌日自決した

源田 実(げんだ・みのる)
明治37(1904)～平成1(1989) 広島県生まれ。海軍大佐。英国駐在を経て昭和16年第1航空艦隊参謀となり、ハワイ作戦を立案。20年第343航空隊司令として紫電改部隊を率いて「源田サーカス」の異名をとる。戦後航空自衛隊に入り空将、航空幕僚長。37年参院議員(当選4回)

淵田 美津雄(ふちだ・みつお)
明治35(1902)～昭和51(1976)奈良県生まれ。海軍大佐。昭和16年赤城飛行隊長となり、真珠湾攻撃隊総隊長。19年連合艦隊航空首席参謀。戦後、26年に洗礼を受け全米47州を伝道して回る。著に「真珠湾作戦の真相」「ミッドウェー」

真珠湾攻撃に幾多の難題

第一に、ハワイへの長い航海の途中で発見されたら？ 第二に、もしハワイに敵艦隊がいなかったら？
余りに危険が大きいし、水深12㍍と海面の浅い真珠湾は航空魚雷が海底に突き刺さって爆発、雷撃が難しい。水平爆撃、急降下爆撃で効果は？

なら海兵卒業成績はどっちが良かったか ―
硬直化した年功序列人事の失敗だった。
米海軍は真珠湾の大打撃の後、キンメル大将（太平洋艦隊長官）を更迭し、後任に少将のニミッツ（海軍省軍務局長）を抜擢した。ニミッツは的確な判断と決断力、正しい人物評価で、部下を適材適所に配置し、艦隊を見事に立ち直らせた。

▽南雲以下 第1航空艦隊幹部が 9月29日
鹿屋基地（鹿児島）で 第11航空艦隊（比島米軍基地攻撃予定）と協議した結果「ハワイ作戦は止めるべきだ」
▽10月3日 草鹿 大西が 山本に 反対意見具申
山本は「真珠湾攻撃は僕の固い信念だ。僕が連合艦隊司令長官である限り、ハワイはどうしてもやる決心だから、いろいろ無理や困難はあろうが、やるという積極的な考えで準備を進めてもらいたい」二人とも 反対を捨てる

●軍令部も「南方作戦に支障を来さない」という条件付で、空母4隻の使用を認めてきた
▽山本は「ハワイ作戦」の 徹底を期すには
主力空母6隻（赤城 加賀 蒼龍 飛龍 翔鶴 瑞鶴）が 絶対必要
▽10月18日 黒島亀人大佐（連合艦隊先任参謀）は 軍令部に
「山本長官は、この作戦を職を賭しても断行すると主張しておられる。6隻案が容れられなければ職を辞する外ないし、我々全幕僚もそうだ」
▽永野（総長）に 裁断が持ち込まれ「山本に、それほど自信があるのなら、やらせようではないか」
▽10月19日「空母6隻でハワイ作戦」が 承認された

●機動部隊は11月26日早朝、単冠湾を出航
▽旗艦赤城以下空母6隻 戦艦比叡 霧島など 32隻
商船と遭遇する恐れのない 北方航路をとって

無線封止は厳重に実施された

増田正吾中佐（赤城飛行長）は、日記に「総艦一切の電波輻射を封止し陸上との連絡は只耳ありて口なし」無線機は封印して手を触れることが出来ないようにし、格納庫の攻撃機の送信機のキイにも白紙を挟み、万一の事故を防いだ。

ニミッツ（Chester Nimitz）
1885～1966 米海軍元帥。昭和16年12月太平洋艦隊長官になり、陸軍のマッカーサーと共に対日作戦全般を指揮した

消極的な人物が指揮官に

南雲は単冠湾を出撃後、草鹿竜之介少将（参謀長）に「僕はえらいことを引き受けてしまった。気を強く持って、きっぱり断ればよかった。出るには出たが、うまく行くのかね」

草鹿　竜之介（くさか・りゅうのすけ）
明治25（1892）～昭和46（1971）東京生まれ。海軍中将。赤城艦長、航空戦隊司令官を経て昭和16年第1航空艦隊参謀長。連合艦隊参謀長、軍令部次長を歴任

艦隊幹部の反対意見

草鹿「真珠湾攻撃は敵の懐に飛び込むようなもの。国家の興廃を賭ける戦争の第一戦に、そんな投機的作戦は採るべきでない」
大西「戦争の早期終結を考えるにはフィリピンをやっても構わないが、真珠湾のようなアメリカを強く刺激する作戦は避けるべきだ」

黒島　亀人（くろしま・かめと）
明治26（1893）～昭和40（1965）広島県生まれ。海軍少将。昭和14年連合艦隊先任参謀となり、山本に重用される。18年軍令部第2部長（戦備担当）

行動秘匿の陽動作戦も活発に

空母がみんな突然沈黙しては、かえって怪しまれる。九州、瀬戸内海にいるように見せるため無線のニセ通信が活発に交信され、艦載機の飛び立った陸上基地では練習航空隊が入れ替わって激しい訓練を再開した。

▽開戦日を「12月8日」と決めた 最大の理由は
機動部隊の真珠湾攻撃を 成功させるため
ハワイは 7日の日曜日で 将兵の休養日
湾内に停泊の軍艦も多く 月齢19日の月夜に
▽攻撃開始は ハワイ時間午前8時とされた
東京(8日午前3時30分) ワシントン(7日午後1時30分)

●問題は、日本の最後通告をどうするか
▽軍令部は 開戦の企図を隠すため
交渉継続の ゼスチャーをとるよう要求
東郷(外相)も「自衛の戦争に最後通告は不要」
▽昭和天皇は 御前会議の後 東条を呼び
「最後通告の手交前に、攻撃開始が
起こらないように」無通告攻撃を注意された
▽山本(連合艦隊長官)も 2日 最後の上京の際 海軍省に
「事前通告は、必ず確実にやってもらいたい」

「開戦に関するハーグ条約」

明治40年ハーグ(オランダ)で調印。「締約国は、理由を付した開戦宣言の形式、または条件付開戦宣言を含む最後通牒の形式を有する明瞭かつ事前の通告なくして、その相互間に戦争を開始すべからざることを承認す」
日本は45年1月13日、条約を批准しており、当然この条約に拘束される。

▽東郷も「国際法遵守の点で日本の信用に疑念を
持たれるよりは、事前通告をした方がよい」
▽軍令部と協議の結果 事前通告は
真珠湾攻撃が始まる30分前
「ワシントンで7日午後1時」と 決まった
▽山本は「奇襲成功」を知ると すぐ参謀に確かめた
「外務省の手筈は大丈夫だろうね。どこかに手違いがあっては、だまし討ちということになりかねない。よく調査してくれ」

●通告は午後2時20分と遅れ、空襲が始まってからから1時間後という大失態になってしまった
▽全ては ワシントン大使館の無規律 怠慢だった
▽最後通告の主要部分は 3つの電報で 訓令された
▽第901号電「これから重要な電報が行く」の予告

「開戦日切迫」を隠すため、横須賀海兵団は連日、大勢の水兵が繰り出し、東京見物。午前9時の早朝見学を申し込まれた朝日新聞が、「輪転機の回っていない時間の新聞社見学なんて意味がない。もう少し遅くしたら」と言ったところ、海軍省の返事は「いや、構わない。その代わりお願いだが、見学の模様を写真入りの記事にして派手に扱ってほしい」
開戦前日の7日には、在京の外国大使や夫人が歌舞伎座に招待された。

「開戦紙面」を作った東京日日

8日の朝刊でただ1紙、「開戦日」を匂わせる紙面を作ったのが東京日日(現毎日新聞)。横トッパンが「東亜攪乱、米英の敵性極る」5段見出しで「断乎駆逐の一途のみ 隠忍限度あり 一億の憤激将に頂点」
「毎日新聞百年史」によると、海軍担当記者がある提督を訪ね、「雲行きが怪しいのじゃないか」「きちがい沙汰だ」「じゃ、やるんですか」提督は、見ていいよと言わんばかりに机の上にザラ紙の1綴りを置いたまま「ちょっと、厠へ行って来る」表紙には「対米英作戦要項」とあり、開戦期日が12月1日から10日まで。戻って来た提督は「これを見せたら僕は銃殺だ」
7日になって陸軍担当記者が日米交渉決裂の情報を掴んできて、「間違いない」となったが、検閲で押さえられたら何にもならない。情報局次長に当たると、「事実がそうだという記事は困る。決裂以外に道はないという表現なら、押さえないようにしよう」
用意してあった予定原稿を、主観的な表現に改めて掲載に踏み切った。

▽第902号電 通告本文で 長文のため14部に区分け
第14部が最後通告の部分 その末尾は
「今後交渉ヲ継続スルモ妥結ニ達スルヲ得ズト認ムル外ナキ旨ヲ合衆国政府ニ通告スルヲ遺憾トスルモノナリ」
▽第907号電 手交時刻を指令したもので
「本件対米覚書ヲ貴地時刻七日午後一時ヲ期シ米側ニ(ナルベク国務長官ニ)貴大使ヨリ直接ご手交アリタシ」
▽外務省は 電信課長が 綿密周到な計画を立て
午後1時手交に 十分間に合うように 打電した
▽第902号電は 第13部までが318行なのに対し
最後通告の第14部は わずか17行
13部までを 6日中に タイプしておいたら
「午後1時手交」に らくらく 間に合っていた
▽加瀬俊一(北米課長)は
「こっちが寝ないでやっているのに、まさかワシントンが送別会だ、今夜は遅いからもう帰ろうと、のんびりムードとは夢にも思わなかった」
▽7日朝 第13部のタイプに とりかかったのは
奥村勝蔵1等書記官(昭和28年吉田内閣外務次官) ただ1人
慣れない手つきの 雨垂れ式タイプ
完全主義者で ミスタイプごとに 打ち直した
▽手交時刻が「午後1時」とわかり
野村 来栖が 玄関で足踏みしながら
「まだか、まだか」と 催促しても
奥村の手は震え ミスタイプが 増えていった
▽ハル(国務長官)との会見を 1時45分に延ばしたが
全ての清書が終わったのは 午後1時50分
▽野村 来栖が 国務省に到着したのが 2時5分
真珠湾攻撃は 45分前に 始まっていた
▽野村が 最後通告を手交すると
ハルは 長官室の大時計を見て
「午後2時20分」の時刻を 宣言してから
「自分は五十年の公生活を通じて、かくの如き虚偽と歪曲に満ちた文書を見たことはない」
▽野村 来栖は 大使館に帰って ハワイ空襲を聞き
初めて「午後1時手交」の意味を 知った

●アメリカの暗号解読チームは、はるかに勤勉だった

なぜ「だまし討ちになったのか」

第901号電は、6日午前中にワシントン大使館に着いていた。「覚書は長文なので全部の受電が終わるのは明日になるかも知れない。提示時期は別電するが、訓令次第いつでも手交出来るよう、文書の整理その他、予め万端の手配をしておいてほしい」追いかけて第904号電で「タイピストは絶対に使うな」と、これから送る電報が機密で、重大訓令であることを予告。

大使館は、土曜とはいえ当然勤務者を増員、徹夜してでも電報を解読、清書にかかるべきだった。ところが、大使館員のブラジル転勤が決まり井口貞夫(参事官)以下幹部全員が、夕方から送別会に出かけてしまった。

第13部までは、夜11時頃には解読を終わっていたが、書記官室に回しても誰もいない。清書もせずに放っておかれた上、深夜遅く戻った井口は、会計担当の若い補助員を当直に残して、電信室の全員も帰宅させた。

井口 貞夫(いぐち・さだお)
明治32(1899)～昭和55(1980)和歌山県生まれ。昭和16年駐米大使館参事官。戦後、終戦連絡中央事務局総務部長。26年外務次官。29年駐米大使、34年台湾大使

加瀬 俊一(かせ・としかず)
明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡外相秘書官。16年北米課長兼東郷外相秘書官となり終戦時は情報課長。戦後33年駐ユーゴ大使。著に「ドキュメント 戦争と外交」

大失態の責任追及は？

奥村は戦後「翻訳に手間取ったのは事実だが、不思議なのは、手交時刻の第907号電が『普通電』だったことだ。

▽ルーズベルトは 6日夜9時半 13部までを読んで
「This means War」(これは戦争を意味する)
▽米政府首脳は その夜は 何の行動も起こさず
第一線にも 何の警告も 出していない

動き出したのは、「午後1時手交」を知って

マーシャル(参謀総長)は午前11時半、警戒電報を出すことにしたが、スターク(海軍作戦部長)は「現地司令官を混乱させる」と反対した。解読チームは「午後1時はハワイでは午前7時半に当たる」とコメントしていたが、スタークは「日本軍の襲撃があるとすれば未明だろう」それにハワイではないと思っていた。1日の海軍情報部の報告では「日本の戦艦、空母はみんな瀬戸内海や九州にいる」とされていた。しかも「英機、日本の輸送船団発見」の情報もあり、日本の第一撃は東南アジアだろう、決め込んでいた。

▽マーシャルは 7日午前11時40分 戦争警告を打電
スタークも思い直し 陸軍電報を
「海軍側にも示すよう」 要請してきたが
フィリピンなどへの打電が 優先され
ハワイは 電波の状態も悪く 民間無線に
▽ハワイの陸軍司令官が 電報を受け取ったのは
空襲が始まって 7時間も 経ってからだった

●米国は、日本が真珠湾を攻撃するとは思ってもいなかったし、そんな力があるとも思っていなかった

日本海軍を過小評価していた

ゼロ戦(零式艦上戦闘機)は、昭和15年7月に採用されてから中国戦線で1年間に撃墜・撃破266機、損害わずかに2機という戦果を挙げていた。中国空軍を指揮していたクレア・シェンノート(米陸軍退役大尉)は「ゼロ戦恐るべし」の詳細な報告を送っていたが、陸海軍は「日本にそんな優秀な戦闘機があるはずがない。中国の誇大な報告に惑わされたのだろう」と見向きもしなかった。

▽キンメル(太平洋艦隊長官)は「戦争警報」に
ウエーク ミッドウェーの 防備強化を優先し
飛行機輸送に 2隻の空母を 派遣していた

このため他の文書の中に放置され、気付いた時には通告予定時間が迫っていた」肝心要の電報が普通電なんて、まずあり得ないことだが、敗戦のショックもあり、事実関係、関係者の責任が追及されることはなかった。

外務省が「極めて遺憾であり申し開き余地はない」と、公式見解を表明したのは、53年後の平成6年だった。

戦争は7日朝に始まっていた

6日午後1時45分、マレー半島攻略に向かう第25軍の輸送船団が英哨戒機に発見された。7日午前9時50分、英哨戒飛行艇が再び接触して来ると船団上空を護衛中の陸軍戦闘機10機が、打電の暇も与えず撃墜した。これが、太平洋戦争の第一弾だった。

8日午前1時25分、山下奉文中将率いる第25軍のコタバル上陸作戦が開始された。真珠湾攻撃に先立つ約2時間前。英国には何の通告もしておらず、無通告攻撃だったが特に問題にされることはなかった。

山下　奉文(やました・ともゆき)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生まれ。陸軍大将。航空総監などを経て昭和16年第25軍司令官となりシンガポールを攻略。19年第14方面軍(比島)司令官。戦後「マニラ虐殺」の責任で処刑された

「真珠湾攻撃」情報

グルー(米大使)は、昭和16年1月28日付電報でペルー公使から聞いた話として、「日本は真珠湾攻撃を計画している」と報告している。まだ山本構想具体化の前で、米海軍も「この流言は信じられない」と片付けている。

米海軍が関心を示したのは、ホノルルの日本総領事に宛てた電報(9月24日

▽ショート(艦隊司令官)が 取った措置も
日系人による 破壊工作対策だった
夜間でも 監視しやすいように
飛行機 軍需品を 1ヵ所に集めたため
日本軍の 絶好の攻撃目標となり 被害を拡大

●山本が「強襲」を覚悟していた真珠湾攻撃は、次々と不測の事態が重なり、「奇襲」になった

▽淵田中佐指揮の 第1次攻撃隊183機は
7日午前6時 オアフ島北方425キロで発艦
淵田は ラジオから流れる 音楽放送で
方位を測定しながら 真珠湾へ向かった

レーダーに発見されたが…

オアフ島北端のレーダー基地は7時2分、北西から接近する大編隊を発見。情報部に問い合せると「心配するな、それは味方だ」陸軍はフィリピンの防衛強化にB17爆撃機をハワイ経由で輸送している最中だった。監視時間も「日本の攻撃があれば未明だろう」と午前7時までに変更に。その時間は過ぎており、追跡電波が山に遮られたところで監視を打ち切った。

▽オアフ島は 雲に覆われていたが
真珠湾上空だけは 全くの 上天気だった
▽淵田は 7時49分 「ト連送」(全軍突撃せよ)
3分後に 「トラ トラ トラ」(我奇襲に成功せり)
▽7時55分 急降下爆撃隊が
ヒッカム飛行場(フォード島)に 第一弾を投下
▽戦艦アリゾナは 火薬庫に被弾 8時2分 沈没した
▽8時49分 第2次攻撃隊171機が殺到
10時頃には 攻撃を終わって 母艦に帰ってきた

●真珠湾攻撃は、「アメリカの敵愾心を掻き立てる結果になり、失敗だった」の見方があるが…

▽米国は 「レインボー計画第5号」を発動
戦略方針は 最強の敵「ドイツ打倒」を 最優先
米軍主力は 大西洋及び欧州に 展開させる
▽対日戦では アラスカ ハワイ パナマ
「戦略三角形」の 確保に努める
フィリピンは 放棄してもよい考えだった

付)。真珠湾の戦艦、空母について正確な停泊位置の報告を求めたもので、日本海軍は吉川猛夫(病気で海軍をやめた予備役少尉)を「森村正」という変名でホノルル総領事館員として送り込み、情報収集に当たらせていた。

吉川は12月5日、「戦艦8隻在泊、空母2隻出動中」と正確な報告を送って来た。米国が逮捕しなかったのは、外交暗号解読の事実がわかってしまうのを恐れて、「泳がせておけ」と、指令が出たためだと言われる。

グルー(Joseph Clark Grew)
1880～1965 昭和7年米国駐日大使として来日。開戦で帰国後国務次官、長官代理を歴任し、天皇制存続に尽力した

なぜ、第3次攻撃をしなかったか

淵田は帰艦すると「すぐ攻撃隊を送るべきです。攻撃目標は海軍工廠、次いで燃料タンク」と進言した。山口多聞少将(第2航空戦隊司令官)も蒼竜から「第二撃準備完了」と信号を送ってきたが、山口が「南雲さんはやらんよ」と洩らしたように機動部隊は反転、帰途に。

長門(連合艦隊旗艦)でも山本は「南雲はやらないだろう」と言っていたが、淵田は「その来るや魔の如く、その去るや風の如しであった」

海軍工廠、燃料タンクを破壊していたら、ハワイの基地機能はマヒし、米軍の反攻はもっと遅れていたろう。

山口 多聞(やまぐち・たもん)
明治25(1892)～昭和17(1942)東京生まれ。海軍少将。戦艦伊勢艦長、第1連合航空隊司令官。昭和15年第2航空戦隊司令官となりミッドウェー海戦で空母飛竜と運命を共にした。死後、中将に進級

▽海軍は 太平洋艦隊を 攻撃的に運用
日本の マレー半島攻略作戦を 牽制するため
マーシャル・カロリン諸島攻略を 準備していた
▽それが 太平洋艦隊の壊滅で
日本は 何の不安もなく 南方作戦を進められた
▽問題は むしろ「空の時代」の扉を 開きながら
勝利におごり 本当の意味を 掴んでいなかった
▽日本が「航空第一主義」をとるのは 18年6月
この方針到達に 開戦以来 1年7ヵ月もかかった

●ルーズベルトは、真珠湾攻撃を知っていたのか？
▽「日本に先に…」なら 真珠湾攻撃だけで十分
戦艦退避など 迎撃態勢を 取れたはずだ
▽「真珠湾の真実」(スティネット)では
「赤城だけで連絡電波60回 無線傍受129回」
米側は それを傍受して ルーズベルトは
「ハワイに向かっていることを知っていたのだ」
▽防衛研修所(防衛庁)は 平成13年8月
長谷川喜一大佐(赤城艦長)の 航海日誌を
ホーム・ページに公開 スティネット説を否定
▽海軍の暗号は モールス符号ではなく
5ケタの数字を使った「D暗号」
▽「D暗号」が 米側に盗まれたのは
昭和17年1月20日 伊号第124潜水艦が
オーストラリア沖で 撃沈され
艦内から D暗号書と使用規定が 回収された時

●「ハル・ノート」だけを見れば、米国外交の挑発だった
▽しかし その種を蒔いたのは 全部日本
・関東軍は 満州を武力占領するため
昭和6年9月 柳条湖で満鉄爆破 満州事変
・盧溝橋事件を 支那事変に拡大したのも
華北の権益を握ろうとした 陸軍だった
・米英が 経済的圧迫を 強めてくると
日独伊三国同盟を結び
南進の道を選んだのも 陸軍だった
▽軍部に 敢然として ものを言う政治家は
五・一五事件 二・二六事件で 殺されていた
▽米国の 外交戦略を読むのに 疎かったし
「敵を知らず己れを知らず」 太平洋戦争へ

「レインボー計画第5号」

明治42年に対日戦を想定して「オレンジ計画」を策定したが、こうした対一国戦争計画では複雑化した国際情勢に対応出来ないとして、昭和16年5月、英仏蘭など民主主義国家と提携、日独伊枢軸国家に対抗する戦争計画を立てた。敵・味方の組合せが何通りも出来るので、七色の虹にちなみ「レインボー計画」と名付けた。

「1回だけ電波を出した」

11月30日夕、哨戒隊として先を走っていた伊号第23潜水艦が機関の故障で遅れ出し、心配性の南雲が「どこにいるのか」と電波を出させた。淵田は戦後の座談会で「何度も出したのか」と聞かれて、「1回だけや。そんな馬鹿なことたびだびせんわ」

長谷川艦長(赤城)の航海日誌

機動部隊が11月26日、単冠湾を出航してから12月7日までの日誌全文で、「日誌を読む限り、無線封止を破って電波発信の事実は認められない」
12月6日付に1ヵ所だけ「緊急信にて通信部隊発信」の記述があるが、同研修所は「東京通信隊が発信した」と解釈するのが妥当としている。

海軍の「D暗号」

開戦時、25種類の暗号書を使っていたが、艦隊と中央で最も多用された。「新高山ノボレ」の場合、新、高、山を1字ずつ5ケタの数字にした上で、さらに5ケタの乱数を加算して2次暗号化する。東京通信隊が船橋送信所・大鉄塔(高さ200㍍)からラジオ放送と同じように、一方的に電波を流す形で長波、短波の2つの波で送信した。

「日米開戦　真珠湾攻撃」　関係年表

明治37	1904	2. 10	露に宣戦布告。日露戦争始まる
38	1905	5. 27	日本海海戦。バルチック艦隊を破る
		9. 5	ポーツマスで日露講和条約調印
45	1912	1. 13	日本、開戦に関するハーグ条約批准
大正 3	1914	7. 28	第1次世界大戦始まる
7	1918	11. 11	ドイツ降伏。第1次大戦終わる
昭和 6	1931	9. 18	柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる
7	1932	3. 1	満州国建国宣言
		5. 15	五・一五事件。犬養毅首相射殺される
11	1936	2. 26	二・二六事件。高橋是清蔵相ら暗殺
12	1937	7. 7	盧溝橋事件勃発。支那事変始まる
14	1939	5. 11	満蒙国境でノモンハン事件起こる
		8. 30	連合艦隊司令長官に山本五十六
		9. 1	第2次世界大戦始まる
15	1940	5. 7	米、太平洋艦隊のハワイ常駐発表
		7. 24	海軍、零式戦闘機（ゼロ戦）制式採用
		9. 23	日本軍、北部仏印に進駐
		9. 25	米、日本の外交暗号を解読
		9. 27	日独伊三国同盟、ベルリンで調印
		11. 5	米ルーズベルト大統領三選される
		12. 27	「帝国海軍16年度作戦計画」策定
16	1941	1. 7	山本、海相に「ハワイ作戦構想」提示
		1. 28	グルー米大使「真珠湾攻撃情報」打電
		4. 10	第1航空艦隊を編成
		4. 13	日ソ中立条約、モスクワで調印
		4. 18	野村吉三郎大使から「日米諒解案」の電報。日米交渉始まる
		5. 14	米、「レインボー計画第5号」策定
		6. 22	独軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる
		7. 21	仏政府、日本軍の南部仏印進駐受諾
		7. 25	米、在米日本資産を凍結
		7. 28	日本軍、南部仏印に進駐開始
		8. 1	米、対日石油輸出を全面禁止
		8. 25	新鋭高速空母翔鶴竣工（9. 25瑞鶴）
		9. 6	御前会議、「対米戦決意」の国策要領
		9. 16	海軍、「ハワイ作戦」初の図上演習
		10. 16	第3次近衛文麿内閣総辞職
		10. 17	東条英機に大命。「白紙還元の御諚」
		10. 18	東条内閣発足。外相に東郷茂徳
		10. 19	「ハワイ作戦、空母6隻で実施」承認
		11. 5	御前会議、「帝国国策要領」決定（12月1日まで交渉、成功しなければ開戦）
		11. 15	連絡会議「戦争終結促進ノ腹案」決定
		11. 21	連合艦隊「フジヤマノボレ」を発令
		11. 25	寺内寿一南方軍総司令官サイゴンへ
		11. 26	機動部隊、早朝単冠湾出航、ハワイへ ♦夕刻（東京27日7:00）ハル・ノート手交
		11. 27	連絡会議、米の最後通牒と結論♦スターク作戦部長、各基地に「戦争警報」
昭和16	1941	11. 29	天皇の希望で重臣懇談会開かれる
		11. 30	高松宮、天皇に戦争回避を訴える
		12. 1	御前会議、「対米英蘭開戦」を決定
		12. 2	陸軍部隊に「日ノ出ハ山形トス」海軍部隊に「新高山ノボレ一二〇八」
		12. 6	連絡会議、対米最後通告を「ワシントン午後1時（ハワイ空襲30分前）」と決定♦外務省、午後8:30最後通告の打電開始♦モスクワ目前、猛吹雪の中、独軍の敗走始まる♦英機、マレー攻略輸送船団発見
		12. 7	英飛行艇撃墜（9:50）太平洋戦第一弾
		12. 8	**太平洋戦争始まる**

東京時間	ハワイ時間	ワシントン	（○数字　日本は8日、ワシントン、ハワイは7日）
⑧0:30	⑦5:00	⑦10:30	米側「午後1時手交」を解読
1:25	5:55	11:25	第25軍、マレー・コタバル上陸作戦
1:30	6:00	11:30	真珠湾第1次攻撃隊183機発進
1:40	6:10	11:40	マーシャル参謀総長、戦争警告打電
2:32	7:02	12:32	オアフ島レーダー、大編隊を発見
3:19	7:49	13:19	ト連送、「全軍突撃せよ」を命令
3:22	7.52	13:22	トラ、トラ、トラ（我奇襲に成功せり）
3:25	7.55	13:25	ヒッカム飛行場に第一弾投下
3:32	8:02	13:32	戦艦アリゾナ、大爆発を起こし沈没
3:50	8:20	13:50	米海軍省に「ハワイ空襲」の第一報
4:05	8:35	14:05	野村大使、米国務省に到着
4:19	8.49	14:19	第2次攻撃隊171機の攻撃始まる
4:20	8:50	14:20	野村大使、ハルに最後通告手交
6:00	10:30	16:00	大本営「米英軍と戦闘状態」と発表
9:00	13:30	19:00	機動部隊、北北西に進路、帰途につく
10:30	15:00	20:30	ハワイ陸軍司令官、戦争警告電受領
11:30	16:00	21:30	「真珠湾攻撃成功」の臨時ニュース
11:45	16:15	21:45	宣戦の詔書発布される
⑨2:30	⑧7:00	⑧12:30	ル大統領、議会で「屈辱の日」演説

昭和16	1941	12. 10	マレー沖海戦で英戦艦2隻撃沈♦グアム島、タラワ・マキン島占領
		12. 11	独伊、対米宣戦布告
		12. 12	閣議、「大東亜戦争」の呼称決定
		12. 16	戦艦大和（69, 100トン）竣工
		12. 23	ウエーク島占領
		12. 25	香港占領
17	1942	1. 2	マニラ占領
		1. 11	海軍落下傘部隊、メナド（セレベス島）占領
		2. 14	陸軍落下傘部隊、パレンバンに降下
		2. 15	シンガポール占領
		6. 5	ミッドウェー海戦。空母4隻を失う
		8. 7	米軍、ガダルカナル上陸。反攻始まる
20	1945	8. 15	敗戦
		11. 15	米議会、真珠湾調査の上下合同委